

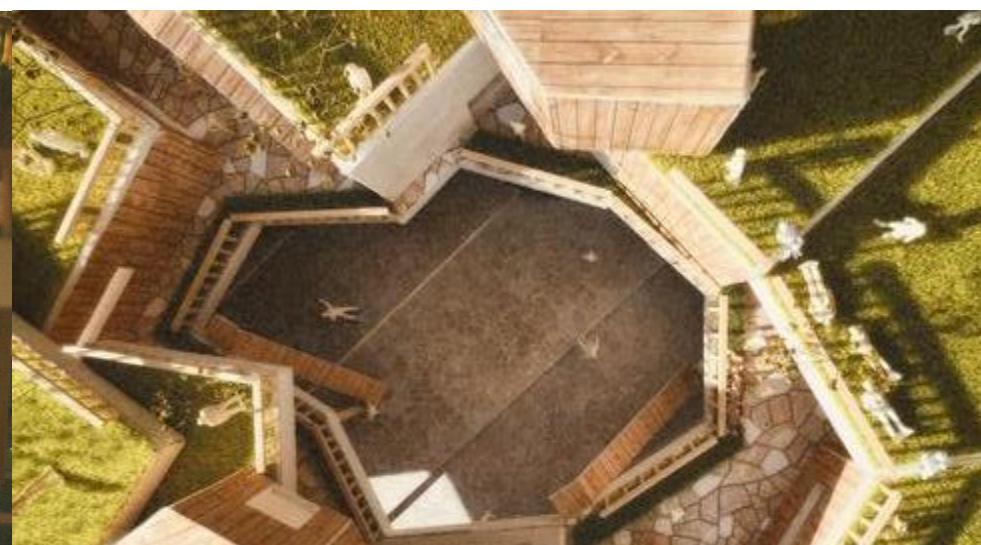
神楽坂に佇む、ひらかれた駅舎広場



計画条件	
構造	: RC造
階数	: 3階建て
敷地面積	: 2598.44m ²
建築面積	: 約1263m ²
容積率	: 105.1%
建ぺい率	: 48.61%
用途地域	: 商業地域
高度地区	: 40m
地区計画等	: なし



駅舎 | 軽やかな光の中で人々がひと時を過ごす駅舎。その空間を包むのは、全面ガラス張りのファサード。内部に開放感を与えるだけでなく、利用者の視線を自然と駅の奥にある広場へと導く。



中央広場 | ただ広いだけの「何もない広場」ではなく、大小様々な「居場所」の集合体となる。これにより、大きなイベントから個人の休息まで、多様な活動が自然発生的に生まれ、常に賑わいが絶えない心臓部となる。



細道 | 建物に囲まれた空間が、神楽坂の細道のような雰囲気醸し出す。偶然の配置から生まれた道筋が、訪れる人にふと立ち止まる「余白」の時間をもたらす。

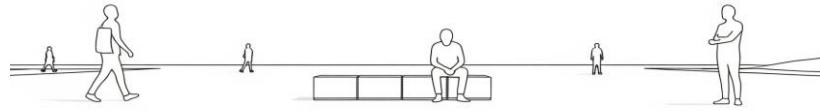
00 時間が重なり続けたまち

花街として始まり、文化や知を受け入れてきた神楽坂。時代の変化の中で独自の雰囲気を保ちつつ、今も新しい暮らしの形を模索している。この場所には、長い年月をかけて積み重なってきた固有の時間がある。



01 まちの「余白」

設計したのは建物ではない。人々の活動によって表情を変え続ける「まちの余白」である。無造作に積み重なる小さな空間の重なりが、新たな居場所や交流を生み、神楽坂の時間を未来へとひらく都市の新しい玄関口となることを目指す。



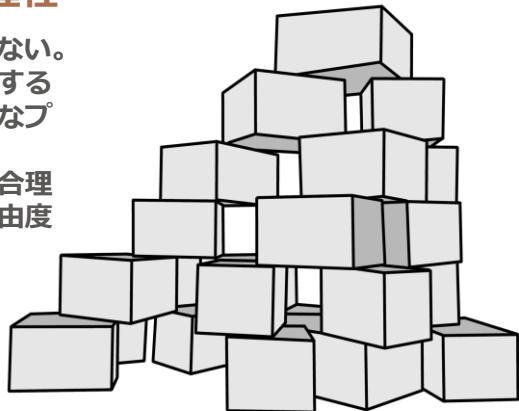
02 建築の背景：駅舎のないまちに顔をつくる

神楽坂駅には明確な「駅舎」がなく、駅周辺は玄関口としての役割を担えていなかった。地下鉄出入口の前に本施設を配置し、駅機能を補うと同時に、まちの「顔」となる居場所を創出する。



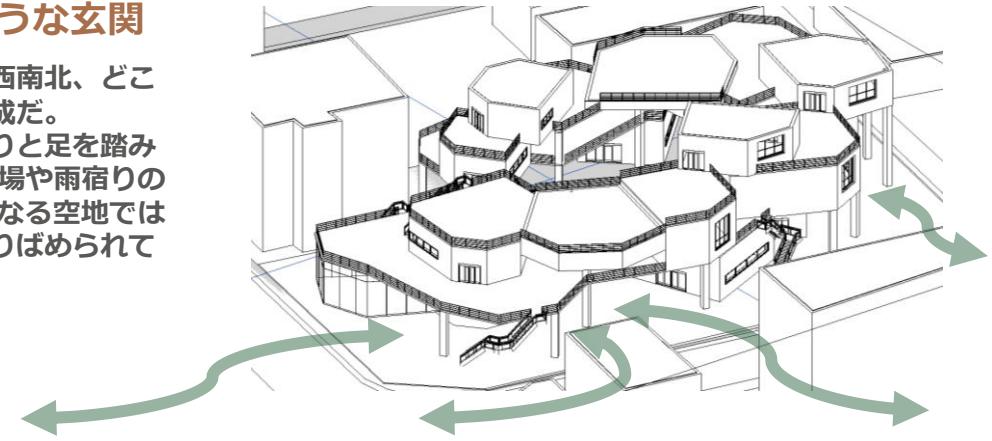
03 設計手法：不揃いが生む合理性

建物の向きや大きさは、あえて揃えていない。無作為にブロックを積み、構造的に成立する範囲で間引くという「ジェンガ」のようなプロセスから設計が始まった。一見ばらばらに見える構成は、構造的な合理性と、多様な用途を受け入れる空間の自由度を両立させている。



04 アプローチ：路地のような玄関

正面玄関という概念は捨てた。東西南北、どこからでも自然にアクセスできる構成だ。神楽坂の路地を歩くように、ふらりと足を踏み入れる。駅前には待ち合わせの広場や雨宿りの場所、奥には静かな中央広場。単なる空地ではなく、大小様々な「居場所」が散りばめられている。



05 平面図：階層ごとに変わる風景と空気

無造作な配置が生む「余白」は、階を上がるごとにその質を変えていく。

- 1階：中央広場 駅舎や店舗を分散し、隙間に「子広場」を配置。待ち合わせや雨宿りなど、日常が入り込む賑やかな場となる。
- 2階：屋上テラス カフェや託児所から視線が抜け、空を眺めてのんびり過ごせる。穏やかな時間が流れる場所だ。
- 3階：展望の場 街並みを見渡せる、最上階の店舗空間。

天井の高さや囲われ方を意図的に変えることで、各階で全く異なる雰囲気を創出した。吹き抜けや階段を移動するたびに風景が一変し、利用者が自分だけの「お気に入りの場所」を発見できる構成だ。

- 1-1 駅舎
- 1-2 待合室
- 1-3 店舗
- 1-4 店舗
- 1-5 店舗
- 1-6 店舗
- 1-7 柱のみ・雨宿り
- 1-8 柱のみ・小広場

- 2-1 カフェ
- 2-2 休憩場
- 2-3 子ども施設
- 2-4 カフェ
- 2-5 カフェ

- 3-1 店舗
- 3-2 店舗
- 3-3 店舗



06 屋上テラス：空に持ち上げられたプラザ

屋上に求めるのは、「空を見る静かな場所」と「特別な体験ができるイベント空間」の二つだ。このテラスはその両方を叶える。普段は空を眺めてのんびり過ごす開放的な広場として、時には街のイベントの舞台として、神楽坂に新たな視点を提供する。



07 託児所：賑わいのコア

屋上に子供の声を遮断するのではなく、駅の活力として取り込んだ。託児所は吹き抜けの大きな空間と階段によって屋上テラスと直接つながる。子供たちが空間の高低差を探索し、発見する様子が施設内の各所から視界に入る。「見守られている」安心感と「子供のいる風景」という豊かさを両立させた。



08 壁の材料

神楽坂の裏道の情緒を継承し、1階は黒味の木材で陰影と奥行きを強調。細道のような構成とグレーの石・レンガ舗装が落ち着いた街の記憶を映し出す。2・3階は芝生と赤みの石・レンガが広場性と温かさを生み、その素材感に調和するようコンクリートと暖色の木材を選定。階ごとの素材対比で、小さな建築群が重なり合う表情をつくる。



09 結び：そのまま改札口へ

「余白」を巡る体験は、単なる移動ではなく、まちの時間を楽しむことそのものである。その余韻のまま、日常を止めずに地下ホームへと導かれる。本計画では既存の2番出口付近に階段と地下通路を増設し、駅舎への連続的な動線を形成した。ここは、駅舎を持たなかった神楽坂の、新たな玄関口となる。



10 立面図

立面図が示すのは、平面と立面の双方向から生まれた「余白」の多様性だ。2層分の高さがある広場、3階までつながる吹き抜け、低い天井に包まれる空間。床の高さをズレさせることで、上階の床が底になり、下階の屋根がテラスになる。どこにいても「斜め上」や「斜め下」に別の誰かの気配を感じる、立体的な視線の交差が空間に奥行きを与える。

